

週刊 武四郎

第6号

2018年(平成30年)5月16日(水)
発行・松阪市

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

モースに勾玉を見せびらかす

明治になってからの武四郎さんは、古銭や勾玉などの玉類の蒐集家として知られていたもので、様々な人がそのコレクションを見に松浦邸を訪れました。

エドワード・モースもその一人です。モースって、あの大森貝塚を発見したモースです。彼は、日本での出来事を『日本、その日その日』という本に残しています。その中には武四郎さんの家を訪ねて勾玉を見せてもらった話も記されています。

ちょっと引用しましょう。
「かなり有名な古物蒐集家松浦武四郎を訪問したところが、非常に親切にむかえてくれた。召使いが箱をいくつか持ち出すと、松浦氏は大きな束になっている鍵で、それ等の箱をあけた。鍵には二つ、象牙の札がついている。(略)

彼はそこで長い糸を通した玉

——それは主としてコンマ形の石である勾玉、その他の石英、碧玉、及び他の鉱物でつくったもの——を取り出し、それを物見台にかけた。それ等の多くは非常に古く、大部分日本のもので、そしてすべて模糊たる歴史的過去時代に属する。これ等は皆埋葬場や洞窟から発掘されたので、中には土器の壺の中で発見されたものもある」

この時の様子をモースはイラスト入りで記していますが、へ物見台」というのは十字型のネックレス掛けで、どうやら武四郎老人は、勾玉の太首飾りを見せびらかすために専用の台を用意していたようです。ちなみに、このモース先生はへ両手利きで、同時に右手で文字を書き、

左手では絵を描くことができたといえます。

勾玉コレクションについては、いつか改めて書きたいと思いますが、象牙の札がついていたというモースの記述からも武四郎さんのコレクター魂が偲ばれます。それにしても、モースは、勾玉のことをへコンマ形の石」と書き残しているのが面白いですね。たしかに勾玉のあの形……コンマです！



松浦武四郎 (1818 ~ 1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

